

研究報告1 「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」

(その五) 現代、そして未来を生きる人びとに見えるもの

岡 田 健

はじめに

永年にわたる世界遺産「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」をめぐる「平泉の景観」に関する考察は、平泉に現存する、あるいはかつて存在した仏教寺院における建築と苑池等の景観、背景に立つ山（金鶏山）の眺望について、これらを「浄土を構成するもの」として捉え、個々の要素、及び全体の関係性を、いかに国内のみならず世界の人びとが分かるストーリーとして構築し、提示していくか、というものである。これは、言うまでもなく12世紀にさかのぼる奥州藤原氏による都市造営の歴史と意味を説き起こすものであるが、これに世界遺産という位置づけを求めることは、その景観を保全し、改善し、これらの活動を通じて（地域の住民をはじめとする）人びとがその景観の意義を理解し、「親しみと誇りの持てるまちづくり」の実現を目指すものである。

私はこれまで4回の研究を通じて、人はそもそも何を見てそれを「景観」と認識するのか、ということを考えてきた。第5回となる今回は、これまでの考察のまとめとして、「平泉の景観」は、現代に生きる人びとにとってどのような存在としてあるのか、ということを考えてみたい。

もちろん、私たち自身は、本当の「浄土の景観」を見たことがない。私たちが“知っている”のは、仏教の伝来とともに中国大陆からもたらされ継承された絵画作品に描かれた世界であり、それらをもとに設計し作り出した宇治・平等院鳳凰堂をはじめとする当時の建築物である。そしてこれらが幸いにも現存しているので、「浄土の景観」を具体的に「イメージ」することができるのである。



無量光院跡から金鶏山方向を望む 令和6年3月20日

とりわけ平泉に関しては、歴史学・考古学・仏教学・美術史学・建築学等の専門家による膨大な学術的蓄積があり、いわゆる「平泉学」としての多彩な議論が続けられているが、その“専門家たち”による高度な議論が、現代の人びとによって理解されているとは限らない。

しかし人びとは、一定の「イメージ」とともに平泉に暮らし、それを求めて平泉を訪れる。

1 彼岸と此岸

「彼岸と此岸」というキーワードは、現在が取り岩手県が取り組んでいる「政庁・柳之御所遺跡」の世界遺産リストへの追加登録を目指すにあたって、無量光院跡から金鶏山を望んで想像される浄土の景観（彼岸）と現世にある政庁（此岸）を対比させて考えられたものと理解している。

平泉町では現在でも着々と発掘作業が続けられ、毎年その成果が公表されているが、従来から『吾妻鏡』の記述にあるとおり宇治・平等院に倣ったと言われてきた無量光院阿弥陀堂の建築に関して



無量光院復元CG（平泉町HP「平泉の文化遺産」より）

あったかのように言うことは正しいのだろうか。CG画像のように、金鶏山の山頂に日が沈む光景を見ることができるのは、晴れた秋分か春分の日、正面の、限られた距離からでしかない。少しでも角度が異なれば、すでにそのような光景は見ることができない。だがおそらく誰も、このように細かなことを言い立てたりはしない。それは、そこに創り出された「イメージ」に納得しているからであろう。

二つ目は、考古発掘によって明らかにされた遺跡の一つひとつが、「仏国土（浄土）」を示す装置としての発見につながったのは確かだが、それを単に歴史を物語る遺跡群として捉えるのではなく、現代において意味のあるものとするためには、平泉全体の空間、すなわち都市空間としての平泉において、それらがどのように機能するものとして意味を持っていたのか、ということ意識しなければならないのではないか、ということである。それでこそ、ほんらい浄土景観の装置ではない政庁・柳之御所遺跡の存在は意味を持つのではないだろうか。

2 此岸平泉のこんにち

ここで、視点を変える。現代の平泉に住む人びと、平泉にやってくる人びととはどういう人たちなのであろうか。

（1）平泉町が取り組むまちづくり

平泉町は、令和3年8月に「2021-2030 第6次平泉町総合計画」（平泉町まちづくり推進課所管）を発表し、「輝きつむぐ理想郷—いにしへの歴史と希望ある未来、そして人を育むまち」をスローガンにまちづくりに取り組んでいる。これは、平成23年に策定した「新平泉町総合計画」が「やすらぎと文化をおりなす千年のまちづくり」を将来像として掲げ、その実現に取り組んできたことを承けたもので、青木幸保町長はこの第6次総合計画の前言として、「この10年間は、「平泉の文化遺産」の世界遺産登録を皮切りに、道の駅平泉のオープンや工業団地への企業立地をはじめとする産業の充実、さらには平泉スマートインターチェンジや新しい社会教育施設の整備に着手し、活力に満ちたまちづくりに向けて、本町の魅力向上と新たな価値創造に取り組んできました。」と述べている。平泉町に

は、近年では新たな発掘成果をもとにして三次元データを活用した復元案が示され、さらに背後の金鶏山の向こうに太陽が沈む（秋分・春分の？）光景がCG画像として示されるなど、まさにデジタル時代ならではのイメージの創作によって、人びとに、より現実的な（現実であるかのような）視覚的理解を提供するようになっている。

しかしここで留意すべきことが二つある。まず、そこはかつて発願者とそれに連なる一部の人びとだけが立ち入ることのできる空間だったのではないか、ということである。

そこに阿弥陀堂と苑池、背後に金鶏山が見える「景観」があったことは事実として、あたかもそれを「誰もが見たもの」で



において、平成23年の世界遺産登録が重要な起点となったことは言うまでもない。

そのまちづくりにおいて、「平泉の文化遺産」はどのような貢献をするものとして位置づけられているのだろうか。まちづくり自体は町政全体の多岐にわたるものであり、それらは相互の関連しあいながら推進されるものであり、とりわけ産業・観光・交通・環境などは物理的に文化財・文化遺産との関係で捉えられる必要がある。いっぽう「歴史と文化」と言う場合には、これらを保全し、活用する具体的、直接的な人の関りが必要となる。

「総合計画」は、基本計画に挙げる6つの基本目標のうち、6番目を「歴史と文化を継承し、交流と創造が花開くまち」とし、その「基本施策1」に「世界文化遺産の保存と活用」という項目を掲げている。そして、「世界遺産のまち」の責務として、とい

う言葉を使いつつ、「平泉の文化遺産」を未来に継承していく取り組みを推進する、と謳っている。

ここで注目したいのは、ここで「生活の中でのSDGs」として、この「世界文化遺産の保存と活用」に関連して「町民の皆さんや地域に期待すること（生活の中での取り組み方）」が記載されていることである。SDGs（Sustainable Development Goals）は、言うまでもなく2015年の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい社会を目指す国際指標であるが、日本では国を挙げてこれに取り組む中で、各都道府県・市町村においては、まさに平泉町のような中長期的総合計画を立てるとき、行政全分野の取り組みがSDGsに示された17のゴールのどれに該当するのかを示すことが一般に行われている。

平泉町はここでは「関連するSDGsのゴール」として、「4. 質の高い教育をみんなに」「11. 住み続けられるまちづくりを」「17. パートナリシップで目標を達成しよう」の3つを挙げている。そして、

- 平泉の文化遺産について学び、保全に協力するとともに、その魅力をPRしましょう。
- 一人ひとりが平泉のガイドであるという気持ちをもって、平泉の文化遺産への理解を深めましょう。
- 「世界遺産のまち」で暮らしていることに誇りを持ち続けましょう。

と記している。

（2）平泉町の人口動向

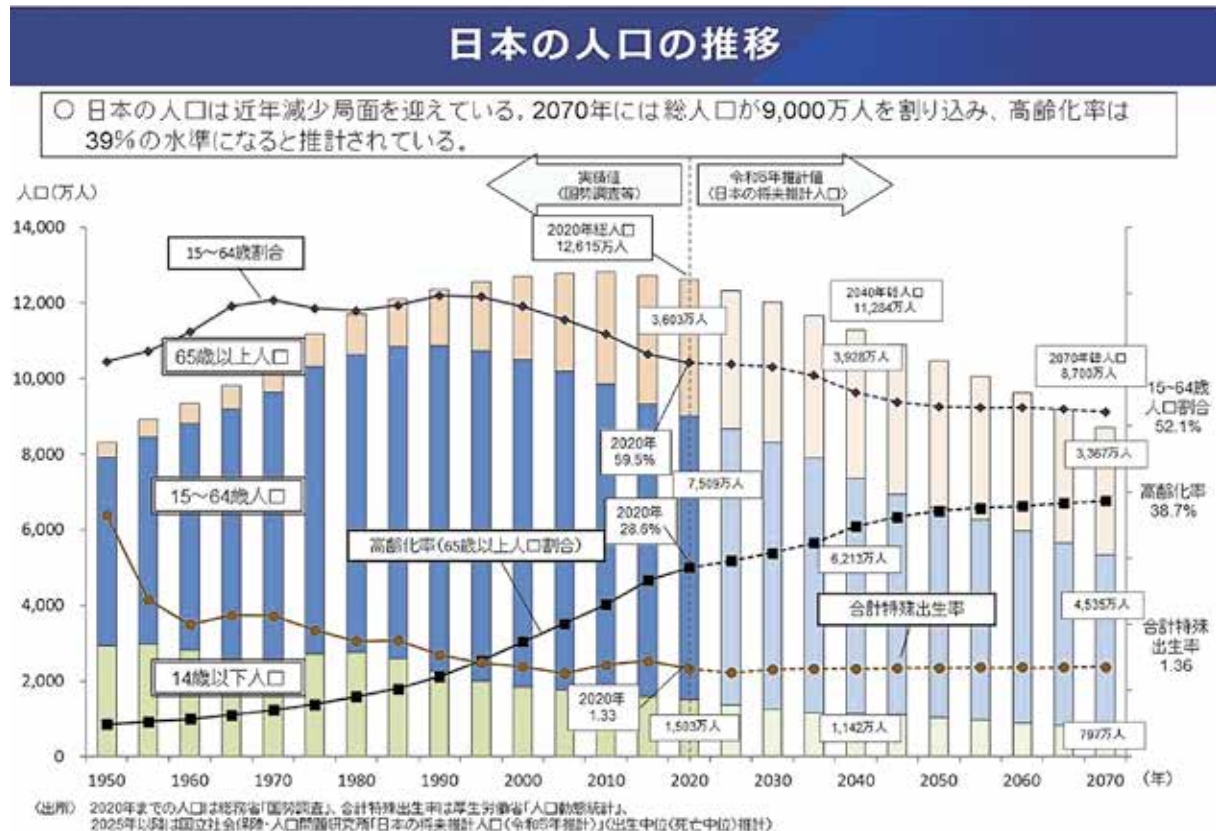
その具体的な担い手として期待される町民の状況はどうであろうか。

青木町長は同じく前言で「人口減少と少子高齢化社会の加速、高度情報化の急速な進展、新型コロナウイルス感染症を教訓とした「新しい生活様式」の確立など、社会情勢は大きく変化してきており、時代の流れに的確に対応できる「持続可能なまち」へ向けた取り組みが求められています。」として、平泉町が現実抱えている諸問題を示した上で、今後10年間のまちづくりの指針としてこの総合計画を策定したと述べている。

ここでの課題は、何と言っても「人口減少と少子高齢化」である。その状況で、いかにして「持続可能性」を担保するのか。

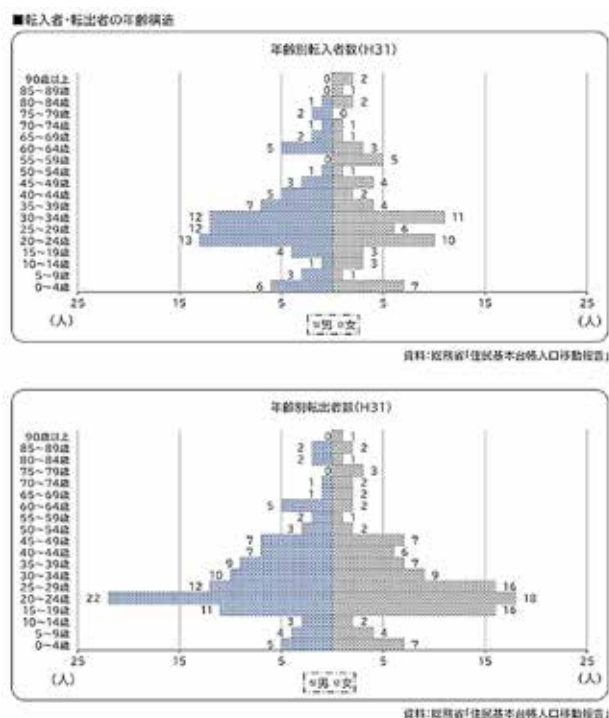
「人口減少と少子高齢化社会の加速」は、もちろん日本全体が抱える問題である。日本全体としては平成20年（2008）の1億2,808万人をピークとして人口減少が始まって、令和47年（2065）には8,808万人にまで減少すると推計されている。

いま平泉の人口動向を、「平泉町人口ビジョン2021」に拠って見ると、平泉町では昭和60年（1985）



厚生労働省HPより

の総人口9,703人をピークに人口減少が続いている。また平成7年（1995）には老年人口（65歳以上）が年少人口（15歳未満）を上回り、以降、老年人口と年少人口の差が拡大している。その原因はいろ



「平泉町人口ビジョン2021」より

いろあるが、出生数に対して死亡数が一貫して多く、転入者・転出者を比較しても転出者が多いという状況が見られる。

ここで私が注目したのは、転入者・転出者の年齢構成のグラフである。平成31年（2019）の統計を見ると、転入者には20代から30代半ばまでの男女が多いのに対して、転出者では特に20代前半の男女が非常に多い、ということである。数字だけでは判断が難しいが、あるいは高等学校卒業とともにまちを離れるという人が多いのではないかと推測する。

ここで思い出されるのは、「総合計画」に謳われていた「4. 質の高い教育をみんなに」という目標である。小さなころからこれらの学びによって平泉の歴史や文化に触れてきたはずの若者たちが、あるいはまちを離れていく、ということが起きているのかもしれない。

(3) 平泉の観光

観光について、「総合計画」は基本目標3「新たな時代の流れをつかみ、にぎわいと活力を生み出すまち」の基本施策3「観光の振興」において、平成23年（2011）の世界遺産登録以来の様々な取り組みにより、観光客数は年間200万人台で推移しているものの、現状は「通過型観光」が多いため、さらに「体験・交流・回遊」による「滞在型観光」への転換を推進する、と謳っている。そして、SDGsの目標として「8. 働きがいも経済成長も」「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」「11. 住み続けられるまちづくりを」「17. パートナリシップで目標を達成しよう」の4つを挙げ、「町民の皆さんや地域に期待すること（生活での取り組み方）」として、

- 平泉の歴史と文化を学び、理解を深め、その魅力を積極的に発信しましょう。
- 一人ひとりが平泉の顔としての意義をもち、おもてなしの心を持って迎え入れましょう。
- 平泉の伝統行事などに参加し、地域の理解を深めましょう。
- 国際化への意識を高め、外国人観光客への対応力を高めましょう。

と記している。

ここには、雇用の促進もあり、またそのための宿泊施設や飲食施設の整備、さらには「体験・交流・回遊」を期待するための新たな技術開発も期待されている。

ただし、その担い手は流出する若者たちに期待をするのか、あるいは新たに転入してくる人材に期待するのか。いずれにしても、「平泉の文化遺産」を理解している人材であることが必要である。



いっぽう、観光には時どきのブームがあることも確かである。世界遺産登録は、まさにそれが最も高まった時であるが、平泉については、何年に一度かNHKの大河ドラマの舞台として平泉が登場することも軽く見ることはできない。そして、その時にどのようなビジュアルをもって平泉が表現されるのか、ということも重要なインパクトになる。

3 おわりにー「仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の未来

ここで注意しなければならないのは、「総合計画」の基本目標6「歴史と文化を継承し、交流と創造が花開くまち」は、ただ世界遺産のことだけを述べているものではない、ということである。

ここでの基本施策は

1. 世界文化遺産の保存と活用
2. 文化財の調査研究の推進
3. 芸術・文化の振興

の3つから成っている。これを通して、町民は世界遺産のみならず、地域の歴史や文化を物語る様々な文化的所産にも接し、その良き理解者となり、それによって感性を育み、より豊かな暮らしをしていくことを提案している。

確かに、平成23年の世界遺産登録はその重要な契機となった。これを大きな目印として、町民のま

ちに対する関心を引き起こし、より多くの内外からの訪問者を呼ぶことは効果が期待できる。しかしながら、このまちを構成する状況は、もっと多様な要素を持っている。そのことを知ってもらうことにより、イメージ化された「金鶏山に沈む夕日」とは異なる、平泉の多様な魅力を伝えることができるはずである。

このような観点を持つとき、政庁・柳之御所遺跡の存在はより大きな意味を持って伝えることができるのではないだろうか。毎年発掘成果の報告が続く政庁・柳之御所遺跡周辺への期待はますます大きくなっている。平泉という都市空間をどのように形づくっていたのかを知る重要な手がかりが、まだまだ見つかることと期待される。

〔追記〕

令和7年2月1日に平泉世界遺産ガイダンスセンターを会場として開催された平泉学研究会では、私の本報告に対して、人びとが平泉の多様な要素を知るためにはどのような方法が考えられるか、という質問を頂戴した。この問題は平泉町における様々な状況に対する様々な取り組みによってこそ解決の糸口が見つかるものであると思うので、私としては明確な言葉をもってお答えすることができなかった。研究会では、さらに岩手大学教育学部の宮崎嵩啓先生と岩手県教育委員会事務局の長谷川伸大社会教育主事から「学校教育における世界遺産の教材化についての研究 - 『探究・平泉の文化遺産』の制作とその活用 - 」と題する報告があった。そこでは日本における世界遺産教育についてその先駆的活動となる奈良市における取り組みを紹介した後、平泉を題材とした世界遺産教育の展開として、その積極的な取り組み、とりわけ生徒たちの生きいきとした参加の様子が紹介された。私の報告は、このような実践的活動を念頭に置かず述べたものであり、不勉強であったことを深く反省した。いっぽう、両氏の報告に対しては、岩手県立千厩高等学校校長の熊谷道仁先生によるコメントがあった。そのコメントにおいては、現在の学校教育の現場では、学習カリキュラム等の事情によって、必ずしもこのような文化遺産に関する教育の時間を十分に取ることができない、ということが紹介された。ここには私を含めて三者三様の捉え方とそれぞれの現実の課題がある。これらの報告とコメントをただ記録として留め置くのではなく、次期研究における重要なテーマの一つにして頂きたいと思い、ここに追記することにした。

【参考文献】

都市史学会編『都市史研究』10（山川出版社、2023年10月）

「2021－2030第6次平泉町総合計画」（平泉町まちづくり推進課、2021年8月）

「第6次平泉町総合計画_第4期（2024－2026）実施計画」（平泉町、2024年3月）

「平泉人口ビジョン2021」（平泉町、2021年3月）

「平泉町観光振興計画」（平泉町、2023年3月）

「2023年一関市・平泉町観光統計データ分析」（2023年度一関・平泉観光アンケート調査結果）（一般社団法人世界遺産平泉・一関DMO）



世界遺産「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」をめぐる
「平泉の景観」に関する考察

- ・ 仏寺院建築とそこに作られた苑池、背景に立つ山（金鶏山）など、
- ・ 浄土空間を構成する個別の要素の理解、
- ・ その関係性の理解に重点を置き、
- ・ これを「文化的景観」と位置づけ、
- ・ その景観を保全し、改善し、
- ・ これらの活動を通じて（地域の住民をはじめとする）人びとがその景観の意義を理解し、
- ・ 「親しみと誇りの持てるまちづくり」の実現を目指す。

はじめに

- これまで4回の研究

人は、そもそも何を見て、それを「景観」と認識するのか

- ◆ 景観を創るために山から見下ろしたときの下界の見え方
- ◆ 山に建立された寺院、平地に建立された寺院、それぞれの人里との関係
- ◆ 寺院及びその周辺の（自然地理的）立地環境
- ◆ 美術作品（絵画）における景観表現から考える「平泉の景観」

●今回➡「平泉の景観」は、現代に生きる人びとにとってどのような存在としてあるのか。



Copyright (C) 2020 世界遺産平泉保存活用推進実行委員会. All Rights Reserved.



Copyright (C) 2020 世界遺産平泉保存活用推進実行委員会. All Rights Reserved.



毛越寺HPより

1 彼岸と此岸



平泉町HPより



平泉町HPより

留意すべきこと

そこはかつて発願者とそれに連なる一部のひとだけが立ち入ることのできる空間だったのではないのか？



熱帯地景CG

留意すべきこと

考古発掘によって明らかにされた遺跡の一つひとつが、「仏国土（浄土）」を示す装置としての発見につながったのは確かだが、それを単に歴史を物語る遺跡群として捉えるのではなく、現代において意味のあるものとするためには、平泉全体の空間、すなわち都市空間としての平泉において、それらがどのように機能するものとして意味を持っていたのか、ということ意識しなければならないのではないのか

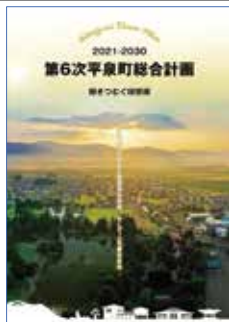
留意すべきこと

それでこそ、ほんらい浄土景観の装置ではない政庁・柳之御所遺跡の存在は意味を持つのではないだろうか。



2 此岸平泉のこんにち

- (1) 平泉町が取り組むまちづくり
「2021-2030 第6次平泉町総合計画」
(平泉町まちづくり推進課所管)
「輝きつむぐ理想郷—いにしへの歴史と希望ある未来、そして人を育むまち」



2 此岸平泉のこんにち

そのまちづくりにおいて、「平泉の文化遺産」はどのような貢献をするものとして位置づけられているのか

- まちづくり自体は町政全体の多岐にわたるもの
- それらは相互に関連しあいながら推進されるもの
- とりわけ産業・観光・交通・環境などは物理的に文化財・文化遺産との関係で捉えられる必要がある。

2 此岸平泉のこんにち

そのまちづくりにおいて、「平泉の文化遺産」はどのような貢献をするものとして位置づけられているのか

SDGs (Sustainable Development Goals) と文化遺産

●生活の中でのSDGsへの取り組み

「世界文化遺産の保存と活用」に関連して「町民の皆さんや地域に期待すること（生活の中での取り組み方）」が記載されている

平泉町が挙げる「関連するSDGsのゴール」

4. 質の高い教育をみんなに

11. 住み続けられるまちづくりを

17. パートナリーシップで目標を達成しよう

SDGs（Sustainable Development Goals）と文化遺産

- 平泉の文化遺産について学び、保全に協力するとともに、その魅力をPRしましょう。
- 一人ひとりが平泉のガイドであるという気持ちをもって、平泉の文化遺産への理解を深めましょう。
- 「世界遺産のまち」で暮らしていることに誇りを持ち続けましょう。

2 此岸平泉のこんにち

(2) 平泉町の人口動向

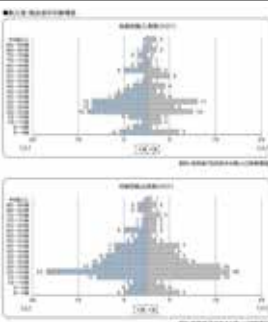
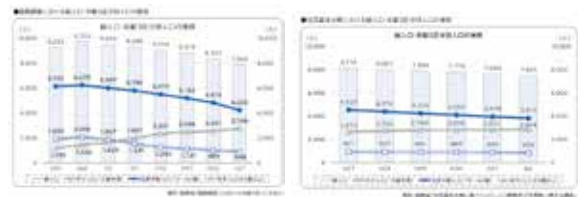
その具体的な担い手として期待される町民の状況

青木町長（前言）「人口減少と少子高齢化社会の加速、高度情報化の急速な進展、新型コロナウイルス感染症を教訓とした「新しい生活様式」の確立など、社会情勢は大きく変化してきており、時代の流れに的確に対応できる「持続可能なまち」へ向けた取り組みが求められています。」

平泉町が現実抱えている諸問題
→ 今後10年間のまちづくりの指針

2 此岸平泉のこんにち

現在の重要な課題＝「人口減少と少子高齢化」

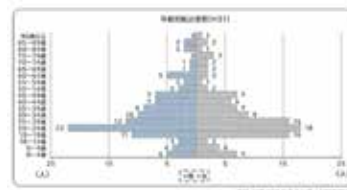


平泉町が挙げる「関連するSDGsのゴール」

4. 質の高い教育をみんなに

11. 住み続けられるまちづくりを

17. パートナリシップで目標を達成しよう



2 此岸平泉のこんにち

(3) 平泉の観光

「総合計画」基本目標3

「新たな時代の流れをつかみ、にぎわいと活力を生み出すまち」の基本施策3「観光の振興」

平成23年（2011）の世界遺産登録以来の様ざまな取り組みにより、観光客数は年間200万人台で推移しているものの、現状は「通過型観光」が多いため、さらに「体験・交流・回遊」による「滞在型観光」への転換を推進する

SDGsの目標

「8. 働きがいも経済成長も」「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」「11. 住み続けられるまちづくりを」「17. パートナリシップで目標を達成しよう」の4つを挙げ、「町民の皆さんや地域に期待すること（生活での取り組み方）」として以下を提案する。

- 平泉の歴史と文化を学び、理解を深め、その魅力を積極的に発信しましょう。
- 一人ひとりが平泉の顔としての意義をもち、おもてなしの心を持って迎え入れましょう。
- 平泉の伝統行事などに参加し、地域の理解を深めましょう。
- 国際化への意識を高め、外国人観光客への対応力を高めましょう。

期待されていること

- 雇用の促進
- そのための宿泊施設や飲食施設の整備
- 「体験・交流・回遊」を期待するための新たな技術開発

ただし、その担い手は、流出する若者たちに期待をするのか、あるいは新たに転入してくる人材に期待するのか。

いずれにしても、「平泉の文化遺産」を理解している人材であることが必要である。

観光には時どきのブームがある



観光には時どきのブームがある



おわりにー「仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の未来

留意すべきこと

「総合計画」の基本目標6

「歴史と文化を継承し、交流と創造が花開くまち」

ただ世界遺産のことだけを述べているものではない

「総合計画」基本目標6

「歴史と文化を継承し、交流と創造が花開くまち」

基本施策

1. 世界文化遺産の保存と活用
2. 文化財の調査研究の推進
3. 芸術・文化の振興

これらを通して、町民は世界遺産のみならず、地域の歴史や文化を物語る様々な文化的所産にも接し、その良き理解者となり、それによって感性を育み、より豊かな暮らしをしていく

イメージ化された「金鶏山に沈む夕日」とは異なる、平泉の多様な魅力



「仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の未来

このような観点を持つとき、
政庁・柳之御所遺跡の存在はより大きな意味を持って伝えることができるのではないだろうか。

毎年発掘成果の報告が続く政庁・柳之御所遺跡への期待は、ますます大きくなっている。